

地質 50

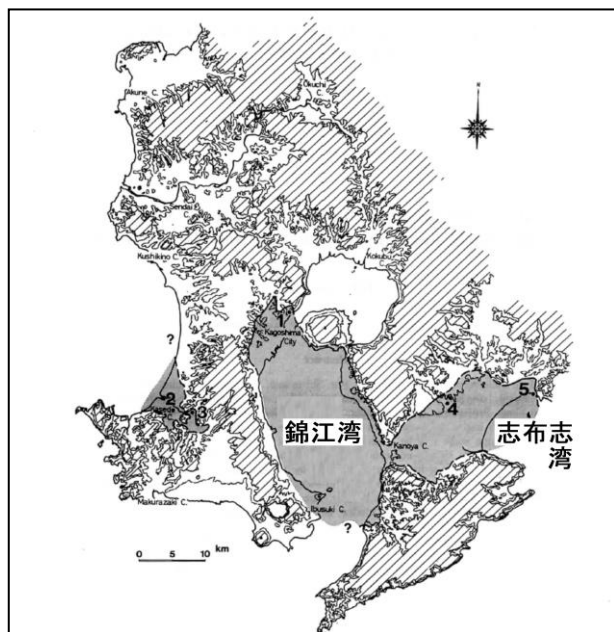
## 形を変える錦江湾

地質担当 多久島 徹

## 志布志湾とつながっていた？

錦江湾はその誕生から現在のような地形であったわけではありません。現在、ボーリング調査や有孔虫などの化石の調査から、錦江湾の成り立ちに関する研究が進められ、多くのことがわかってきました。

約100万年前に鹿児島地溝の活動によって、形づくられた錦江湾ですが、約12万5000年前は、東側の志布志湾と繋がっており、そこから海水が侵入する内湾であったと考えられています。鹿児島市の城山遊歩道で見られる堆積岩の地層（城山層）は、この当時に堆積した地層です。さらに、この地層に含まれる化石から、当時の城山周辺は浅い海であったことがわかっています。また、当時は桜島はまだ誕生しておらず、現在の湾奥部（桜島より北側）も海域ではありませんでした。



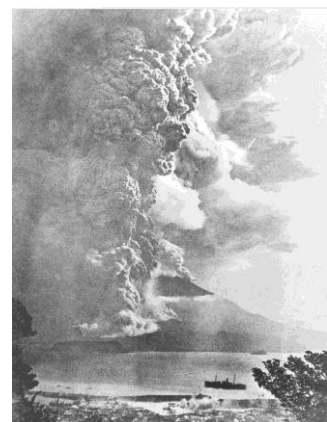
約12万5000年前の錦江湾（鹿児島湾の謎を追って（大木公彦著）から引用・加筆）

## 桜島大正噴火

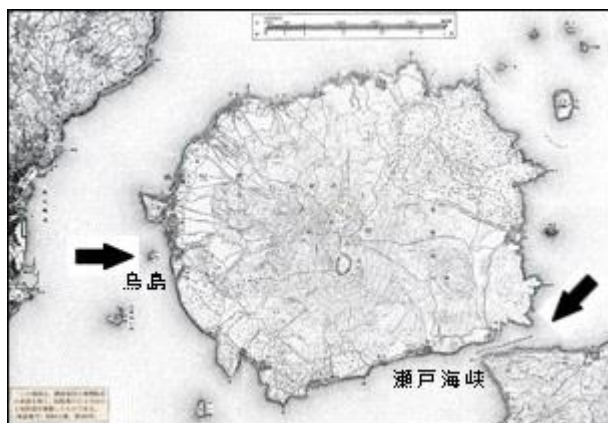
錦江湾の形の変化を写真や地図で確認できる大きな出来事があります。大正3（1912）年の桜島大正噴火です。この噴火は「国内における20世紀最大の噴火」といわれています。この噴火で、桜島の東西の山腹から溶岩が

流れ出し、錦江湾に達しました。大正噴火前の桜島はもともと島でしたが、このときの溶岩によって、大隅半島との海峡が埋められ、陸続きとなったのです。同じように、桜島の西側には鳥（からす）島という島がありましたが、この島も溶岩に埋められ、現在ではその姿を見ることはできなくなりました。

地球の大きな営みによって形を変え続ける錦江湾。数十万～数百万年後にはいったいどんな形をしているのでしょうか。



桜島大正噴火



大正3年噴火前の地形図（明治35年測図 大日本帝国陸地測量部作成した地図に加筆）



大正3年噴火後の地形図（大正4年及び5年測図 大日本帝国陸地測量部作成）